

これからの幼児教育

牛島義友

我がくにの幼児教育や高等学校の就学率は九〇%をはるかに越して教育の普及率は世界の最高水準に達した。また幼稚園と保育所の階層的格差も小さくなり、社会的ニードにしたがってそれぞれ活用されている。施設の設定も全国的に差が小さくなり、地方にも中々設備の整ったものが見られるようになった。御殿場市などは特殊な防衛関係からの収入でモデル校を造ろうと張り切っている。

また障害児の保育所も普通幼児の中に取り入れられつつあつて、すべての子どもが等しく教育される姿になりつつある。

この恵まれた条件における今後の幼児教育の方向としては国際的教育と個性教育がその指導目標となるのではなからうか。

本年は国際児童年であつたが、以前はこのような機会に日本の子供をめぐる悪条件を指摘して、子供を守る運動を展開したものであるが、今回はそれに代つて、世界の子供、特に発達途上国における恵まれない子供の方に目を向けられたことは、それだけ日本人の目が世界的に開かれたということであろう。しかし多年の伝統から閉鎖性が強く、ウェトナム難民に対しても金は出すが国内に引き受けようという態度は弱い。また我が国は世界経済の調節、世界平和の橋渡しという役割りが要求されるにも拘らず、積極的に働らきかけることが少なく、またこのために必要な国際語の駆使ができない。日本人は外国語をしゃべることのもっとも下手な民族と言われる。したがつて幼児期から国際的視野を広め、国際語（具体的には英語）を話す教育

を開始する必要がある。

他方、教育の個性化、多様化が要求されよう。子供たちには能力、性格においてそれぞれ相異があるので、それが生かされる教育でなければならない。障害児を正常児と共に教育することは大切であるが、これは障害児のすべての機能が正常児と同じようになることを目指すものでもないし、またこのために正常児の教育が足踏みさせられても困る。どのような子供も人として尊敬し、共に社会に生きることを教え、一方能力ある者には弱い者を助けたり全体をまとめて行く指導性の教育に向けるべきである。また外国で育つ者もふえたが、日本に帰ると全然外国語を話さなくなり、忘れてしまう場合も多いが、これほど無駄なことではなく、この特殊な能力をさらに伸ばすような指導が必要である。

また音楽などは幼児期から特に発達する能力であり、絵画、数（特にそろばん）等才能教育として著しい効果をあげるものもある。子供の興味、能力によって特殊な分野に伸ばすこともまた今後の教育にとっては特に必要なことである。すべての子供がいわゆる単一のエリートコースを

求めて、受験競争に走ることはより多くの落伍者を生む教育地獄が現れるだけであろう。さまざまな分野で自分の才能をのばし、社会的役割を果して行かねばなるまい。

このためには画一的教育がもっとも非難されるべきものとなる。今までは教育の機会均等の名のもとに個性教育が軽視される傾向があった。すべての子供が教育され、教育の普及が実現したのだから、これからはすべての子供がそれぞれ十分に伸ばされる密度の高い教育が必要である。このために思い切ってカリキュラムを撤廃するオープンラーニングも必要であり、また幼児教育ではこれをもっとも導入しやすい。津守先生は知恵おくれの幼児の教育に当り、この方法に徹し、一見無計画、放任的のようであるが、いじけた動きのない子供たちも生き生きと生活を楽しむようになっていく。また真に個性的に生きるためには、いわゆる根性が必要である。興味が多方面に散るのではものにならない。今日の恵まれた家庭環境、あるいはソフトムードの保育はこの根性を生むのに適していない。自由と厳しさ、自分が選んだ道に対し、最後まで徹底的に責任をとらす教育が真の個性教育である。